



夢、チャレンジ、世界へ

三浦 雄一郎

おはようございます。今日は、久しぶりに札幌に帰ってきました。つい昨日は、陸奥湾をフェリーで横断しておりました。その奥に下北半島、恐山という山があります。話は全く変わりますが、恐山で世界で一番含有量の多い金が発見された。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、普通1ト当たりにも五グラムくらいあると金山で採算とれるわけですから、それが六五グラム、ですからダンブカー一台どつと鉱石を積むと一キ以上の金とれるなんて、とてもない夢みたいなバカみたいな話。その金山のまわりをカモシカ、熊、うさぎがウロウロしている中、昨日、おとつい、先おとつい、三日間、ウロウロしてきました。その前はハワイで一番大きなハワイ島におりまして、ちょっと関連しておりますリゾートのゴルフ関係の仕事の会議で、ハワイへ行っております。やっと札幌にきて、今日午後から私のホー

ムゲレンデの手稲ハイランドへ帰って、スキーができますけれども、宮様大会、国際大会、またアジア・オリンピックという感じで、札幌もそろそろスキーシーズンがおしまいですけれども、最後の国際大会という形で賑わってくる時期でございます。

私は生まれが昭和七年、一九三二年、青森県八甲田山の麓で生まれました。親父がやはり私の先輩でして、北大を卒業して、学生時代に陸上競技、水泳、それからスキー、勉強以外は全部したみたいで、おまけにバイオリンを弾いたり、マンドリンを弾いたり、今の北大の交響楽団のはしりみたいな、そういう元祖の楽団みたいなまねごとをやっております。親父は生まれ故郷の八甲田山といいますか、青森に帰りました。そして青森で営林局のお役人、まあ山の役人をやったんです。昔はのんきな時代でして、冬の半分くらいは八甲田山にスキ

ーで入って、そして青森の営林局という山の役人の、昔はきこりだとか、あるいは炭焼きだとか、そういう山の仕事をする連中の中で、腕っぷし、足、腰の強い連中を集めて、いつの間にか日本で一番強いクロスカントリーのスキーチーム、青森林友スキー部というのを作りました。その中からオリンピック選手が出たり、そして私も子どもの頃八甲田山によく連れていってもらっては、すごいおじさん達の後を、ちよつとしかつかなかつたんですけれども、遊んでおりました。

ちよつと君達のお父さんの時代と言いますか、私の一番下の息子が二十歳になりました。アメリカのユタ州立大学の学生で、スキーと勉強はやってると思いますが、スキーに熱中しております。長男の方はもう二十四歳。本当はスキーのオリンピックチームに参加するはずだったんですけれども、カルガリのオリンピック寸前に膝を壊して、そしてもう一回復帰しようと思ったらまた去年も膝を痛めて手術しました。

私も北大に入りましてスキー部にもぐりこみました。丁度大倉シャンツェの麓に、昔、荒井山という牧場がありました。その牧場の中に、畳のすりきれた床の抜けたようなオンボロ合宿所があったわけです。そこに過去の偉大なる先輩、オリンピックにいった先輩のスキーだとかが飾ってあったり、オンボロの割には大変伝統あるスキー部だったんですけれども、我々の頃はすっかり伝統も何も全部消えまして、停電状態のスキー部に入ったわけです。偉大なる先輩がやってきまして、「君たちまだ若いし、一生懸命スキーもやっているようだし、考えてみたら勉強は年をとってからでも出来る。スキーは若いうちじゃなきゃ出来ない。」ということを先輩が呟くことを聞いて、それ以来、学校へ行く理由が全然なくなりまして、今日は教養部長の倉島先生も含めて、よわった講師を呼んだものだとか苦笑されていらつしやるでしょうが、そんなわけで学校をサボル理由がつかしました。私共、北大スキー部の連中はもっぱら日曜はスキーしたりアルバイトしたり、僕の方

は山岳部といいますが、山登りが好きだったものですから、そんなことばかりやっていたものですから、学校に行く時間はますます少なくなりました。そして、教養から学部を選ぶ時に、私の同級生で渡辺淳一という小説を書いている者もおりますけれども、彼は少し勉強したので医学部にいきました。僕はいくところがないものですから、どこにしようかと思っていたら、その頃成績の悪い順序に入れるという、獣医学部という動物医者のコースができたわけです。この方が人間の医者になるよりは、獣医ですから実験終わったあと、焼肉ぐらいできるだろうという、そんな理由で獣医学部にもぐりこみました。それでも理科系で実習その他があるんですけれども、スキーの大会になると忙しくて、学校はもっぱら夜、もぐりこんでおりました。ですからどうも今でも僕は北大を夜学で卒業したんじゃないかなという感じがまだぬぐいきれないんですけれども。

その間何をやっていたかと言いますと、例えば秋口になりますと、今、大倉山シャンツェの隣に聖心女子学園の高校があるんですが、あの裏にトンガリ山というトンネルの向こうに山があるんですけれども、その山の本を切りまして、でっかい木をのこぎりで切ったり、まさかりで切ったり、そして勝手にスキーコースを作って滑降の練習をして、今なら盗伐ということになって、大変なことになるんでしょうけれども、まだ大変のんきな時代でもありました。そんなスキーコースを勝手に作ってみたり、あるいは今仕事をやっていますけれども、手稲山の最後のロープウェイのカーブの手前にパラダイスヒュッテという、山小屋がありまして、これはスイス風の山小屋では、日本で一番古いといわれていますが、春休みになるとほとんどそこにこもっては、手稲山の断崖の下、そこへ自分で勝手にポールをたてて、今日は十回滑ろうという感じで、変な熊みたいなスキーをやっておりました。

学生時代に運悪く、たまたま僕の北大の入学式の時に隣にすわってしまった本庄という男がおります。彼は滋賀県の彦根から来まして、

京都大学にいいかな、でも北海道もいいなということで北海道に憧れて、そして二人で入学式。たまたま僕は今よりもっと黒い顔をしておりました。どうせ北大なんか入れるわけないと思っておりました。高校三年間スキートの選手をやっておりまして、青森県代表の国体選手で、どういうわけか高校二年の時に全日本選手権の滑降の部で二位に入ったのですから、それでは将来必ずオリンピックに行くんだというつもりで張り切ってやった割合には、そのあと全然成果がでない。しょうがない、三年生になって、どこへ受験しようか。どうせならスキートの出来る北海道がいいということで、弘前高校から北大へ二五人ほど試験を受けました。弘前高校、青森出身の方もこの中にいるかと思えますけれども、割合青森県では進学校なんですけれど、よく勉強する連中がおりました。その連中がやっぱり北海道へ行こうかということ、僕と一緒に、僕だけはスキーかっぴいで津軽の海を連絡船で渡って、おじさんが南高校のすぐ前に住んでいたものですから、「こんにちは」と言って、一週間前に試験を受ける準備に來たんですけれども、藻岩山、あるいは三角山、大倉山シャンツェ、この辺のリフトは藻岩山に、進駐軍、米軍のそれしかなかったんです。そこへもぐりこんだけど、リフトに乗せてもらえずという感じで、ウロウロしておりました。大倉シャンツェってどういうところだろう、三角山ってどうだろう。朝起きて御飯を食べると、弁当を作ってもらって日が暮れるまで札幌周辺でスキーをやってウロウロ。帰って晩御飯を食べると、中島公園に、昔進駐軍、米軍のスケートリンクがありました。そこから音楽なんか聞こえて、僕もフラフラ誘われて、そしてスケートはいたことなかったんですけれども、はいてみたら二、三回フラフラしたんですけれども、すぐ滑れる。おもしろくなってスケートやって、蛍の光がなつて十時か十一時頃、ふらふらになって帰ってボタンと寝る。朝起きるとまたスキーに、夜はまたスケートと、これだけ滑れば大学の試験滑るのも当たり前だという感じで、受験したんです。

ただ、腕時計なんてしゃれたものを当時は持たせてもらえなかったものですから、おじさんの家にあった、でっかいカチカチ鳴るベルのついた目覚し時計をかりまして、受験の机の上にどんと置きました。受験の注意書きには目覚し時計をもつてはいけないうって書いてなかったものですから。試験の監督の教官がうさんくさそうな顔をしてのぞきました。数学の問題を解いているうちに、「こんなわかんない問題仕方ないな」といい加減いやけがさして、そしてもうわからなかったものですから、しょうがない、答えはこれ以上でないということ、目覚し時計をいじって遊んでいたら、突然ベルがなりだして、試験場が大騒ぎになったりと、大変ろくでもない受験生でありました。

「どうせ俺だけ入れるわけないだろう」ということで、僕はもともと生まれが八甲田山の麓で、今では酸ヶ湯温泉という温泉場があるんですけれども、そこずっと昔から関係しておりました、だめならここで八甲田山の山の案内人でもやってやろうと思って、八甲田山へ帰って、東京、大阪、全国から来る山スキーのファンがおりますけれども、その人達の荷物かっぴいだし、案内人をやっておりました。どうした訳か受験の発表は、どうせ入るわけもない、見に行く必要もないと思っておりました。そしたら麓の青森の町から電話がかかってきて、「お前の名前が新聞に出てる」、「なんででてるんだ。」と言ったら、「北大の合格者の中に入っている」。聞いてみたら、残りの二十四人が全員落第しておりました、僕一人だけが弘前高校から現役で合格してたということだったんです。どうも今でも腑におちないんですけれども、どう見たって僕が一番出来が悪いし、試験もいい加減に出してたわけですから、どうも北海道大学というのは、札幌大学と違って事務上のかなり杜撰なところがあるんじゃないかな、きつと事務上の手続きの間違いで僕の方に合格通知をよこしてしまったんじゃないかなという感じがしています。

それでも一回スキーをかつぎなおして、今言いました通りまた北

海道に來たんですけれども、そうやって運悪く僕の入学式の時に隣に座ってしまった本庄という男。彼は見るからに秀才という言い方はおかしいですけれども、こいつは受験勉強しかしたことがないんじゃないか。その本庄に「お前スキーやったことあるか。」今日も倉島先生に会ったとたんに「スキーやりますか。」と聞いてしまったんですけれども、悪いクセで、人の顔みるたびに「スキーやりますか？」なんて聞くクセがありますけれども、本庄に「スキーやったことあるか？」と聞いたなら、一回か二回、まだやったうちに入らない。「せつかく札幌に來てスキーをしなきゃ女の子にもてるわけがないだろう。」と、彼は女の子にもてたいという一心で、スキー部に二人で新入部員として入りました。

彼は今何をやっているかと言いますと、マサチューセッツ工科大学（MIT）というアメリカで最大の工科大学の海洋研究所の教授と言いますか、親玉になっております。世界の海洋学界のチェアマンと言いますか、議長も努めてまさに世界の海洋学を牛耳っているわけですけれども。ときたま、ボストンの郊外にウッズホール海洋研究所というのがありますけれども、その彼の研究所に遊びに行つて、昔のバカ話をする度ごとに、あるいは本庄が日本に來て、うちへ泊まっていたり、昔の学生時代の、皆さん方と同じ年代の頃の我々の思い出話、バカ話をする中に、やっぱり三浦にだまされて、スキー部に入つてひどい目にあったけれども、今考えてみるとあの時あれほどこいだった陸トレだとか、でっかい荷物をかついで山歩きだとか、あるいはムイネパラダイスヒュッテ、それから空沼小屋と、スキー部はその頃三つの山小屋の管理を引き受けていましたが、その修理だとかででっかい材木をかついだりセメントかついだりという感じで、山小屋の修理をせざるを得なかったんです。そんな重労働をしたり、トレーニングしたり、あるいは死ぬんじゃないかというぐらいの山登り、またスキーの練習と、これが考えてみたらアメリカの大學に來て世界の名だたる海

洋学者と渡り合つて、ソ連からドイツからフランスからスペインからイタリアからカナダ、南米から、まさに學問の世界も昔の武芸者の大袈裟にいますとそういう世界ともよく似ている要素があるという感じで、彼は大學時代に一生懸命山に登る、スキーをする、今の言葉で言いますとそういう体力、そしてまたどうしようもなく頑張らざるを得なかった根性といえますか、そういうものがアメリカの研究所の中で世界の海洋学界を歩きくのに大役役に立っている。

又、もう一つ彼はマネージャー、僕はキャプテン。いろいろ二人とも貧乏だったものですから、スキーというのは今もそうなんですけどもそうだったんです。スキー用具を買う遠征等も含めて大変バカげたお金が必要になります。その資金調達法ということで、当然先輩のところへ寄付をもらいに行つたり、雪印に誰がいる、拓銀に誰がいる、じゃあ道庁に何とか先輩、医者で誰がいる、そういった先輩、あるいは東京まで遠征しては資金集めをする。あるいはダンスパーティー、スキー映画会。今、北大の生協の連中の走りですけれども、その連中と組んでは親父が関係してた青森スキーというスキーメーカーの社長に頼んで、超安売りの大バーゲンセールをシーズン前にやつたりということをやつて資金調達。考えてみたら、今アメリカの海洋研究所をきりもりするのには、学生時代スキーのトレーニング、体力作りとスキーのレースと同じぐらいに金集めての苦心惨憺した経験がものすごく生きているということを言っております。

アメリカの有名大學というのはほとんど私立です。札幌大學と同じです。ですからいろいろな寄付、あるいは研究所を維持するために莫大な予算が必要になってくるわけです。そのためには、例えばアメリカのペンタゴン、国防総省へ行つては予算を獲得したり、また有名なアメリカのコングロマリットの経営者にあつて寄付をお願いしたりします。考えてみたら学生時代にスキー部のマネージャーをやっていた頃と同じような、彼はまた抜群の資金調達能力と言いますか、学者の

くせにそれが関西の近江商人の血をひいているかどうかは別なんですけれども、そういう能力があつて、私共もスキー部の現役の頃、「どうせ俺たちトレーニングをやるなら日本一のことをできる。体力も日本一の体力を作れる。」なんて勝手なことをお互いに言い出して、「しかし道具で負けてはくやしいじゃないか。道具だって世界一のものを使おうじゃないか。」ということ、ヨーロッパへスキーを注文したりしました。オーストラリアの選手は昔はケスレーだとか、クナイスルだとか、あるいはその頃のスウェーデンの板でヨハンセン、ニルセンだとか、いろいろなアメリカのスキー雑誌を見ますと、有名選手のはいっている板があります。これを手に入れよう。そんな感じで大変勝手な理屈をつけては、先輩のいる各企業をまわって歩いては寄附金集めるものをやっております。

これも言うとおかしいんですけども、僕自身もそのあといろいろな海外遠征、今でも数多くありますけれども、例えばエベレスト、このお話はあとでますけれども、この時実際、今からほぼ二十年ちょっと前に計画がおきて、その時できたらシネマスコープで記録映画を作ろうじゃないか。どうせ作るなら映像の方の新記録を作ろうなんて、余計なことを言い出しまして、したらどんどん予算が膨らんで、とうとう三億円というお金が必要になってきました。それであちこち四百社くらいかけずりまわって、靴も腹も減らしながら資金調達。とうとう最後に今の石原慎太郎さんだとか、大蔵大臣やつてる橋本龍太郎さん、ああいう人達と仲良くなりまして、そのおかげでとうとう三億円集まったわけですけども、これが大蔵省で税金をかけるなんていいでしたんです。これはけしからんということで、国家的なプロジェクトだと自分で勝手に思ってたわけですけども、それで今度は当時福田赳夫さんが大蔵大臣をやっております、そこへ橋本龍太郎、それから石原慎太郎、藤島大輔、僕と乗り込んで、大蔵大臣の大臣室、福田さんを捕まえては「税金まけろ、まけろ」、三十分しか時間がな

い。それで計画を説明しながらいろいろやった結果、「君達のために日本の税法を今急にかえるわけにはいかない」という感じで、弱っております。ただ三日くらいしたら秘書官から電話がありまして、これは君達のいろんな計画を聞いて調査してみたら、本当にまじめによくやっているということで、科学技術庁が後援する。そして大阪の万博の記念行事ということもお願いしておいたんですけれども、ここでネパール政府とのタイアップという感じで、うまく国際的なつながりもつけてくれまして、とうとう三億円集めたお金が税金なしで全部使わせてもらえるということになりました。冒険家の私の後輩であつた仲間の植村直巳というのがおりました。彼も登山家とすれば超一流ですけども、彼以上すごい岩登りをやる加藤康雄だとか、数多くの有名な登山家、日本でも世界でもおります。彼も僕と同じように足も短い、あまりさえないずんぐりむっくりの恰好で、もともと運動神経があつてスマートな連中は大勢日本の山岳会、世界の山岳会におります。しかし、ほとんど同じレベルの技術を持ちながら、その人がどんな夢をもつか、俺は何をしたいんだ、どういうことをやるのか、それがその時代の何かもう一つの次の時代を見越せる。

あるいはまた自分自身が見た夢、そういうものを彼の場合は大陸の最高峰、エベレスト、キリマンジャロ、それからマッキンレー、アコンカグア、エルブルス。そういう五つの大陸の最高峰をどんどん登ってみて、そして僕がエベレストを滑ったとき、その真下で僕の滑りをみてその時大変衝撃的だったわけです。もう山を登るだけの時代じゃない。もう一つ新しいそういう自分の何かを求めようということ、彼はそれからグリーンランドへ、北極圏へもぐりこみました。そして犬ゾリ、そして夢は北極点へ単独で到達する。そのあとの夢がやはり南極点の犬ゾリの単独横断ということ、やはり同じスポーツの分野、同じことでもあるわけですけれども、これは野球やていようが、テニスやていようが、ゴルフでもスキーでも同じです。同じその時代

北大の最強の山岳部の連中が十日間かかったところを僕らは三日間で踏破してしまっただけですけども、要するに面倒くさい。俺はもぐって滝の向こうに行くからといって潜って、また、わらじで滝を登って、ザイルでひきあげる。面倒くさいからザックごと川へ流せといって、川へドボンと流してそれを拾いに行ったりと、本当に無茶苦茶な、レンジャーかどっかのスパイの脱出作戦みたいなそんな感じで、やっと十日間のところ三日で滝の最後にたどりついたわけです。そして二〇〇メートルに近い岸壁を登り始めました。本当にリュックサックも五〇キロくらい。二週間分の食糧をもったんですが、これもびしょびしょになったんですけど。最後にあと五〇メートルくらいつめればこれで初踏破だというときに、和田が、これは無理だ、これツルツルだし裏が逆にすりかえっているものですから。これほど命がけで登った最後にここで逃げるというのはもったいない。じゃあ今度は僕が先頭をきって、二人ともロープで結ぶと荷物をしょって上からロープで降ろすからいいし、抜けてしまおう。じゃあ単独で登って上からロープで降ろすからという感じで、リュックサックをしょったまま登りはじめました。そして、天井みたいなそこへ小さな滝ですけども、水がゴーゴーでている。その脇から一生懸命体そっくりかえりながら、やっとそのコケをはぎながら、石のくぼみをつかんで、これで体重かけて大丈夫だという感じで、そしてせりあがりはじめた途端に、このテールブルぐらにあるような岩がぬけはじめたわけです。そしてその岩をかかえて、背中にリュックサックをしょったまま、スーッと今度はスローモーションで落ち始めました。岩と背中にリュックサックをしょったまま、ほとんど五〇メートルくらい垂直に落ちこちて、おまけに二〇〇メートルくらい、四〇度、三五度という感じで、がらがら落ちこちていくわけです。これでは粉々になってしまうという感じで、一生懸命岩をよけて、そしてまた岩が少し体から離れてきました。ただ考えてみたらまだリュックサックをしょって。そして頭を下にして落ちこちているわけです。こ

のままじゃ、ということ、今度はあおむけになったまま落ちこちて、今度は右手でリュックサックのベルトをはずし、これがうまいぐあいにはずれたと思ったら、あとはわからなかったんです。気がついたら岩の角に両手でぶらさがっておりました。そこから二〇〇メートルくらい岩とリュックサックがガラガラ落ちこちていって、そして下で粉々になっておりました。和田の方は、僕が岩とリュックサックにはさまれて、真逆さまにどんどん落ちていくのを見ながら、「あいつの死体をどうやって運ぼうか」ということを一瞬考えてたといいます。それがリュックサックと岩が粉々になって、あいつどこだろうと思ったら、僕は途中の岩にぶらさがってフラフラしている。そこから僕はやっと脱出して、今度はちよつと脇をやつと登り直して登りきりました。こんなバカなことをやって、帰りはまた台風にあつて、また本流の中をやつと泳ぎきって逃げて帰ったりという、インディージョーンズの世界みたいなの、そんな中でやつと生きて帰ったり。そんなことばかりやっていたわけじゃないんですけれども、知床一つぐつと半島を廻ってみようとか、あるいは層雲峡からイコマンベツまで越えてみようとか、スキーの選手のくせに山の方が半分おもしろくて、そんなことばかりやっておりました。

ただせっかくスキーやって、僕の専門がアルペン競技で回転滑降だったんですけどももったいない。じゃあ、北大スキー部がいい。当時部員がほとんどいなくて、実際活動してたのは四、五人しかいなかった。そうしますと、例えばジャンプの枠があくわけです。ということじゃあ大倉シャンツェへ行つて飛んでみよう。僕が一年生の時に入っている宮様大会、これでジャンプも飛んでみたいなどと言ひ出したら、ちょうど枠があいたので入ることができました。ただ一人で飛ぶのもなんとなくあれなんで、僕の相棒で陸上の石塚よしとかという、岩内高校の教頭をやっておりますけれども、そいつをだまして、こいつは陸上の選手で砲丸投げの選手だったんですけども、「おまえ

の馬力、体力でジャンプ飛んだら、砲丸投げよりもっと飛んでいくんだ。」なんておどらせたなら、根が単純で乗りやすい男なものですから、じゃあ僕も大倉山ジャンプを飛ばうという感じで、二人で申し込んで、そして公式練習がありました。前の日あったわけですよ。ゼッケンなんかつけさせられて。で、行ったんですけれども、二人で見ているうちにジェット機みたいな音をたてて八〇何分飛んでくるわけです。見物人のうちはよかったですけれども、いよいよ二人で飛ぶ番になったらなんとなくなってしまうかなという感じになりました。公式練習で怪我したらつまらない、大会でぶっつけ本番ならなかなかなるんじゃないかなんて。本当に今ならとくに失格なんですけれども、とうとう公式練習まで逃げ出して、そしていよいよぶっつけ本番。スタート台までスキーについて、昔はリフトがなかったものですから登っていききました。僕は頂上へついて汗かいて、恐いし、「こんなところなんですか」で登らなければならぬのか、リフトをつけろ」といったら、役員から怒られました。「ジャンプ飛んだこともないくせに、なんでこんなところへリフトつけなければならぬのか、一步一步登ることに意味があるんだ」、なんて説教されたんですけれども。僕はそのころから、リフトをつけてここにレストランでも作れば、いい展望台で商売になるんじゃないかなんて、大学一年生の頃はろくでもないことを考えておりました。そしていよいよスタート台にたちました。当時早稲田の菊地選手とか、吉沢選手とか、今菊地さんは雪印におりますけれども、例の笠谷さんの大先輩。その連中が本当に今、当時の日本のオリンピック代表、世界的にも活躍したその連中が見事な放物線を描いて飛んで行くんですけれども、スタート台にたつてさと思つて上から見ますと、アプローチは見えるんです。しかしランディングバーンが全然見えないんですけれども、その日は天気が大変よくて大通公園なんかも見えて、テレビタワールなんかマツチ棒のようにとがってるんです。あそこまで飛んでいくんじゃないかなんて、そんな感じがし

てました。

そして僕の番がきて、かついで逃げるわけにはいかないのですから、そのまま、スキーもいい加減なスキーで、自分のスキーもなかったものですから、全部先輩のオンボロの、それも左右そろっている板が一本もなかったものですから、かたっぽ黄色でかたっぽ赤なんという板でスタートしてみたら、これがひどいんです。アプローチの溝からしょっちゅうはずれて、あつという間に一〇〇キのスピードを出した、その瞬間に台のはずれにきてしまったんです。しょうがないと思つて、そのころは皆手を前に出して飛んでいたんですけれども、手の前の出し方でカッコ悪いとかカッコいいとかいつてたんですが、僕は手を出す暇がなかったものですから、手を後ろへ引いたまま飛んでしまったんです。そうしたらどうしたわけか、間違つてタイミングがあつてしまひまして、空の上へすぐあがつてしまつて。空飛ぶのは簡単なんです、降り方は全然ならつてなかったものですから、大倉山ジャンプで、空飛び出してからどうやって地球に帰るんだっけ。わずか三秒、四秒たらずの、これが本当に長くて長くて、人生こんな無茶苦茶なことがあつていいのだろうか、本当に下から火事場の消防ホース、これで五本も六本も下からふきあげられて、乱気流の中に入ってきました。それでもどういふわけかどうやってもおりていかない。あとで聞いたら、普通の連中はジャッジ台の目の前を飛んでいくのに、僕だけがスキーの裏しか見えなくて、はるか上飛んでしまったということです。ただ、後半の落ち方はわからなかったものですから、このままじゃ下まで落ちるんじゃないか。今でいうK点をこえて下まで落ちるんじゃないかと思つたくらい高くあがつてしまったんですが、後半ちよつと失速しまして、それでも八七・五分と、その時の二番目の飛距離を、生まれてはじめて飛んだくせに出してしまつたんです。

そんな感じでこれはひどいめにあつたと思ひながら、やれやれやつと帰つてきたという感じでありました。そのあとぼくの相棒が飛ぶと

いうアナウンスがありました、北海道大学の石塚選手、僕はそれが一番楽しみだったんです。あいつはスキーも下手だし、いやだというのをやっとうきあげてスタートさせたんで、ちゃんとスキーはいて飛べということ、言い聞かせてスタートしたんです。そしたら本当に旗がふられて彼が飛んできたんですけども、見たら全然スキーはいてないんです。彼は九〇きぐらいの大きな体、一八〇何センチですから、それがいきなりスキーをはかないで空を飛んでできました。彼のあとを二枚のスキーの板がヒラヒラヒラヒラおっかけてきたんです。彼、あとで聞いてみたらスキーはちゃんとはいんだと言うんですけれど、要するにジャンプのスキー靴というのは普通のアルペンの靴と違って、クロカンの靴にちょっと毛のはえた程度のドタ靴で、ガチャンと踏んでも同じような感じでわからないわけです。そうしますとけたた途端にワイヤーがはずれる。要するにスキーが脱げるということになるので、ちゃんと気を付けて溝を確認してスキーをはけ、ワイヤーをかけると言ったんです。彼本当にあがったものですから、バチンバチンとワイヤーをしめて溝を確認しないで、靴の底にかけてスタートしてしまっただけです。本人に言わせると、ここだと思ってけっしたら、空をみたらスキーがなかったというわけです。仕方ないからそのまま四〇よんじゅう近く飛んできておりました。それから急斜面を雪けむりを熊がころがるみたいに落っこちてきて、そして下の平らなところでバタンと倒れて、そこからムクムクと立ち上がって、雪なんかほろってVサインなんかやっておりました。その頃、札幌は昭和二十八年のことです。から、テレビなんか丸井デパートとか、大きな喫茶店ぐらいいしかなかったわけです。札幌市民は本当に吉幾三の歌の通り、テレビもないラジオもないというくらいじゃないとしても、本当に暇をもてあましていたところですから、長靴はいたりオーバー着たりして、ゾロゾロ見物人が三千人も五千人も、大倉シャンツェに、宮様大会だとか、全日本とか、そんな大会に集まってきておりました。その見物人が本当にス

キーはかないで人間ロケットみたいなのが、ぶっとんだ時にワツとどよめいて、そして彼が下ですくつとたつて今度はVサインだった時は、笠谷選手がオリンピックで優勝したそれ以上の大歓声があがっておりました。やっぱり今日きてよかった、いいものをみると、みんな喜んで帰っていきました。だいたい我々学生時代そんなろくでもない無茶なことばかりを繰り返しておりました。

そんなことをやって、よく死なないで生きていたものだという感じで、それぞれみんな学校の先生をやったり、大学の先生をやったり、どこかの会社で仕事をやったりということをやって、あつという間に定年間近の時代がきてしまいました。そんなわけで、僕も卒業して、このまま卒業したんじゃ、どうせろくなくとも覚えてなかったし、これは卒業したって北海道大学の恥だという感じがしたものですから、四年ぐらい大学に残ってウロウロしていれば少し物でも憶えるだろうということ、大学院でもいこうかと思っておりました。そうしたらどうした間違いか、教授会の方で、三浦は勉強してということ、新しい動物薬理学、僕は動物生理学の教室にいたんですけれども、薬理学の講座ができる。今、北大でついこの前まで学部長をやっておられた大賀先生、この先生が東大の医学部へ内地留学して、帰ってきて助教授になる。じゃあお前助手やれということ、助手をやることになりました。大賀先生が死ねば僕は教授だし、あるいは定年になれば、全く国立大学というのは年功序列の社会ですから、本当にトコロテン式にという感じで、今頃残っているとできの悪い教授なんかでウロウロしているはずなんですけれど。ということ、今度は新しい講座作り、教室のペンキ塗ったり土方みたいな暮らしをやって、実験の真似事をやっているうちにあつという間に一年近くたってしまったわけです。その時にふと思ったんです。この科学の実験の仕方、考え方、学生時代にさぼってなんのことだかよくわからない暮らししておりましたけれども、少し勉強の真似事をやっているうちに、そうだ、科学の

実験の考え方というのをもう一回スキーというものに応用したら。俺はとうとう日本一のスキーヤーになれなかった、しかし、世界一のスキー乗りになってもいいじゃないか、と自分で勝手に思いはじめました。そしてこうやってボヤボヤしているのはもったいない、できの悪い頭で勉強したってどうしようもないという感じがしておりました。

僕は大学二年の頃から変な女と時々同棲しておりました、今でも同棲状態が続いておりました、今では山の神で、彼女の方は僕よりその頃偉くて、今でも僕より偉いんですけれども、学長の秘書をやっておりました、ですから大学を卒業して大学の学長秘書と結婚して、そしてそのまま残って教授になる。うまくいくと俺は北大で学長になるかもしれないから、そのまま秘書で使えるなんて、大変便利だと、そのまま籍を入れてお互いに結婚してしまっただすけれども。二人で共稼ぎ公務員という感じでしておりました。そして二人共なんとなくというよりも、僕にそそのかされて、じゃあやめてどこかへ行こうじゃないか。日本を抜け出そうじゃないかということ、東京へ二人で無職で行ったわけです。まさに吉幾三の「俺東京さいくだ」みたいな雰囲気で行って行ってしまいました。そうやってあつという間に一年、二年、三年、四年、五年くらいたって、その間に運動具屋のアルバイトをしたり、山小屋の荷物担ぎをしたり、自分で世界一になろうという夢を持ちながら、今度は生活に追われて結婚して、子どもができて、もう三十年くらい前の話ですけれども。丁度一九六一年です、ケネディが大統領になった次の年。第一回のプロスキー選手権がある。このニュースを新聞で見たとき、よしこれだ、ということ、突然でいきそこの英語の申込の手紙を大会の会長宛てに出したら、どういうわけか返事がきてしまった。東洋のエントリー第一号として認めてくれるということで、第一回のプロスキー選手権のチャンスを得たわけです。オリンピック、ワールドカップ、アマチュア時代にはとうとう世界の連中とは太刀打ちするチャンスがなかったんです。よしこれ

だ、ということでアメリカに飛んで行きました。飛んで行ったというけれども、金がなかったものですから、あちこち友達から餞別、あるいはそのころアルバイト先のエバーニューという運動具メーカーの社長さんに無理やりお願いして、帰ったら会社のいろいろな仕事も手伝うということで、飛行機賃を出してもらう。あと報知新聞社に行つて、アメリカへ行つて世界のスキーヤーのいろいろな何がしかのそういうお金を集めて、やつと当時の羽田国際空港から、「お前なんか行つたってどうしようもない」と言われながらも、アメリカへ飛んでいきました。

飛んでいつて僕はびっくりしたのは、いきなりサンバレーというスキー場に着いたんです。旭川にサンバレーなんていうスキー場がありますけれども、本物のサンバレーというスキー場に着きました。そして、そのレセプションと言いますか、ホテルの受付、その脇が大会本部なんですけれども、そこへ皆並んでたんで、ソファにどんと腰掛けて順番をまっております。そうしましたら、見たことあるおじさんだな、変なおじさんだななんてジロジロみておりましたら、黒人で唇の厚い、「あつ」と思ったらルイ・アームストロングという一世を風靡したトランペットシンガーといいますが、ルイ・アームストロングがいたり、あるいはアンディ・ウイリアムスとか、そういう人がゾロゾロといるわけです。あるいはよくわからなかったんですけれども、それこそロックフェラーの一族がいたり。いったいなんだ、北海道でウロウロしてそして東京で出稼ぎみたいなセールスマンの出来損ない、やもめで仕事をやっていた者が、いきなり世界のファーストクラス、トップクラスの芸能界、そんな世界にほんと飛び込んでしまったわけです。それから三カ月、アメリカ・カナダで、毎週金・土・日とスキーマの賞金かけたレースを展開してたわけです。当時、トニー・ザイラーがオリンピックで金メダルをとる。私の中学校の一年先輩の猪谷千

春さんが銀メダルということで、日本でも世界でも少しづつスキーマムが起き始めていました。

そうやってレースに毎週でているうちに、少しづつスキーを思い出しました。レースのかけひきを思い出すということで、少しづつ英語の言葉も耳に入りはじめた頃、なかなか予選も通過できないし、どうしてうまくいかないんだろうということでも悩み始めました。ところが超一流のレーサーがときたまコースからアウトして失格したり、あるいは大きなジャンプで転倒したりということで、スキーの神様みたいな、今で言いますと、ツルプリンゲンとか、ジュラルデリとか、あるいはステンマルクみたいなそういうクラスの連中がときたま失格したりすることもあるわけです。人間だから当然失敗も当然だろうと思っておりますけれども、なんか一緒にずっとと一ヵ月二ヵ月暮らすうちに、普段はお互いににバーでちょっとビールを飲んだり、あるいは同じ部屋で暮らして寝てたりということで、例えばオーストリアだとか、スウェーデンだとかフランスだとか、スイスから来た、山から来た青年でおたがい英語もそんなにうまくないという山男と言いますか、スキーの選手なんですけれども、この連中が、一端スキーをはいてスタートにたったら雰囲気ガラリと変わる。キラキラするわけです。そして彼らになるほど失敗あるいはそういう失格をするということは、かえって超一流、世界のトップレーサーほど自分の限界を超えようとしているんだ。かえって二流三流の選手は、俺はどうせ十番以内は無理だとか、ここで十五番まで入ったら立派なものだということでも納めてしまう。頭から自分の限界を決めて、そのへんまで入れば俺はこのへんではないということ。ところが世界のトップレーサー、その頃参加した二〇人ぐらいの連中は、誰が勝っても不思議じゃないという選手ばかりです。そうすると、本当にその時に自分の限界を超えた選手だけがチャンスを得るということを彼らは考えて、ずっとずっと世界のジュニアから繰り返しやってきているということに、当

り前のことに気がついたんです。なるほど世界の超一流のレーサーの、もちろんすごいスキーの技術とかあるいはいろいろな体力だとか、経験だとかという以上に、見えないスポーツの分野といいますか、そういう世界といえますか、そういう見えない分野、集中力、あるいは限界を超えようとする、捨身で何事かにあたろうとする根性というか、そういうものがだんだん少しずつ見えるようになってきました。

それと同時に、今話は変わりますけれども、瀬古選手のSB食品のカレーの会社があります。私の友人で山崎さんという会長が、もともとヨットがすきで石原裕二郎さんや石原慎太郎さんたちとずっと学生時代からやってたんですけれども、中年になってから、世界の最大のヨットレースでアメリカズカップという一四〇年ぐらいの歴史がある、この世界で一番大きなヨットレースに日本のチームとしてチャレンジしようということで、日本チャレンジアメリカズカップというチームを作ったんです。私も応援団の一人といいますが、NHKを辞めた木村太郎さんとか、加山雄三さんと僕の三人が、応援団長木村太郎、副団長加山雄三、それと僕ということで、おもしろ半分に応援しておりますけれども、このチーム作りを今、愛知県の蒲郡というところに合宿所を作ってやっております。それにニュージーランドのオールブラックスという世界で一番強いラグビーチームの名監督といいますが、コーチを連れてきて、基礎体力作りトレーニング、ヨットの技術ということアメリカカップにチャレンジするその青年達を集めてやっているわけですけれども、この前大変おもしろいことを聞きました。その腹筋だとか、腕たてだとか、それぞれのシステムがあるわけです。それぞれのプログラムがあるわけです。テーマは自分で限界だと思っても、腹の底から声を出して、そこから三回超えろ。それを繰り返し繰り返し返しやれば、世界の一流になれるということをコーチが言って、実際にその成果が一年半あまりで少しずつ出始めている。来年二年目、もちろん体力作りだけではないんですけれども、その一つの自分の限

界を超えてから三回、最後の力をふりしぼる。これを繰り返し繰り返しやることによって、お前は世界の一流になれるんだという暗示をかけながら、トレーニングに励んでおりました。

言葉では「限界を超える」と言うことは誰でも出来るんですけども、僕はそれこそ二十七年、三十年くらい前に、やっぱり同じような雰囲気、彼らの練習ぶり、実際練習ぶりを、限界を超えて何が出来るか。それを普段の練習の中で繰り返し繰り返し行い、もちろん人間ですから、スランプだとか、風邪ひいたりどん底がありますけれども、自分でターゲットを決めて、限界を超えることを繰り返しやりながら、いつの間にか実際のレースにおいて限界を超えているというのがなるほど世界の超一流のグループなんだということを、その時、眼のあたりに見ながら感じたわけです。ただし僕はいくら限界を超えようと思っただけで、その時では無理だということがわかりました。ただスキーのレースですから、吹雪になったり、あるいはコースが無茶苦茶。昔ですら圧雪車なんてなかったわけです。皆スキーで歩いてかためるわけですから、コースが二本目は無茶苦茶掘れるわけです。これこそ俺のチャンスだ。あるときはカナダのモントリオール郊外、零下三五度、おまけに霧がかかる。考えてみたら、みんな、「こんな日になんて大会やるんだ、俺やめたやめた」という感じになってる。だったらこれは俺のチャンスだ、これしか俺にはチャンスがないんだ。そういう人の捨てたレースを拾いに拾いまくろうということで、とうとう六位、七位、あるいは八位、時には三位と、そういう記録を出し始めました。とうとうその年のランキングで総合八位に入りまして、これから十年かけて本物の世界一になってみようということでアメリカ・カナダ・ヨーロッパとまわって、やっと遅まきながら世界スキー武者修行。これを二十九歳の時に終えて帰ってきました。

その時に思ったんです。これは十年早くやるべきだった。もし十年早かったらもっともって俺には違った意味の言葉でも、あるいは十年

早かったらアメリカの大統領になれたんじゃないかなという変な気持ちをもちながら帰ってきました。しかしもう一回日本に帰ってそして、世界攻略の作戦を練り直そう。そんなわけで日本にたどりついたわけです。ちょうどその前後、ちょっとその前ですけれども、たとえばボストン交響楽団の指揮者をやっている小沢征爾さん。東朋学園を卒業して、背中にオンボロギター、そしてスクーターで音楽武者修行とヨーロッパの旅に出ました。ドクトルマンボウ航海記、北杜夫さん。これがなんでもドクトルマンボウ航海記という、とぼけた世界一周物語。あるいは予備校の先生をやっていた小田実さんが、なんでも見てやろうと、日本の青年達が自分で体当たりで、世界に自分の目で何かを求めて世界を旅をし始めてたそんな時期でもありました。僕はちょっと出遅れたんですけども、世界スキー武者修行、そして日本にたどりついてこれから本当の世界攻略ということで、作戦をしてみました。

次に狙ったのは、スキーをはいって世界で誰が一番早いか。スキーのスピードレースという名前と呼ばれておりますけれども、キロメタラセンと当時呼んでおりました。要するにスキーをはいって直滑降で誰が一番早いか、バカみたいな単純な競技があるんです。これが三十年ぐらい前の当時でも歴史があったんですけれども、どうしたわけか、日本人がそれに全然参加しようとしなかった。俺達体も小さい、足も短い、スピードには耐えられないんだ、と勝手に自分達が決め込んで、日本人は一五〇^キ以上のスピードには耐えられない、今聞いたらそんなバカな、と思いますけれども、大まじめにスキー連盟の偉い人達も思っておりまして。アメリカ・ヨーロッパを一緒に廻って、確かトニザイラーなんか一七〇^キぐらい、いろいろ大きい連中もおりましたけれども、考えてみたら僕と同じぐらいで一六七^キ、一六八^キ、一七〇前後ぐらいで、そんなに変わらない連中で、すごい選手がたくさんおりました。これは体が大きい小さいだけじゃない。もう一つ二つある

はずだということ、そしてやっとスキーを科学するというか、スポーツを科学するということを本格的にやってみようということで、防衛庁の航空研究所、東京の郊外で中央線の立川にあります。ここに航空研究所があるんですけれども、ここにまず尋ねて行きました。そして風洞実験、飛行機のいろいろな設計の、あるいは船の設計と実験の話を知ったり、また偉い先生達から、おもしろ半分はスキーの好きな人達がたくさんいたものですから、風洞実験をやらせてもらったり。

また、トレーニングは日本アルプスにこもって荷物担ぎをやって、最高一二〇キロくらいの荷物を担いで山を登る、降りる、そして空身で山を走る。これを三年繰り返しやりました。日本アルプスの岳山ではこれはゴリキー組合といいますが、ボツカ組合に入れてもらって、工事現場にセメント運ぶ、機材を運ぶ、山小屋へ食糧を運ぶ。これがどんなトレーニングよりも、今でもそう思うんですけれども、これ以上のトレーニングはないという、考えてみたらこれ以上原始的なトレーニングはないというトレーニングを一年、二年、三年とやりました。そして下界へ降りると防衛庁の航空研究所、これを盛り込んで、メーカーに頼んでおきたいいろいろなスキーの用具とか、あるいはウェアだとかそういうものを風洞実験の中で繰り返しやる。三年ぐらいこういうことをやりますと、もうそろそろ世界で俺は一旗あげれるんじゃないかという感じで、イタリアへ飛びました。スイスのツェルマットの反対側のゼルビニアのレースが一週間ぶつとおしありまして、当時ジャン・クロード・キリーが丁度二十歳になったばかりでして、僕は三十一歳だったわけです。この連中をいつの間にか追い越しておりまして、レース一週間最終日は二位に入っておりまして、そしていよいよ最後の夜、よし明日は一番だ。十四位から七位、四位、三位、二位という具合に繰り上がってきたものですから、そして丁度マッターホルンの脇の水河が頭から突っ込んでいくわけですけれども、四、二〇〇からスタートして、斜度は二〇度ぐらいから、ほぼ三八度そして

四〇度ぐらいの急斜面を一、〇〇〇メートル下降する。下の方に幅二〇メートル、長さ一〇〇メートルの光電管をきって、それを区間スピード時速に換算する。そういうレースだったわけです。

そして頭から突っ込んでとうとう一七〇キロを超える。一七一キロということ、ところがちよつと、最後はのしあげる、この時、頭のあげ方、手の位置がちよつと悪かったと思つたとたんに気がついたらぶつとんでおりました。ぐるぐる一七〇キロ超えて氷河の海をころがって、水が厚いもんで、この辺がズタズタになって、これを一回だけならよかったんですけれども、一週間のレースで三回転倒しておりました。最後の前の日ももう一回転倒して、やっとホテルへはいずって帰ってきて、全身あざができてほとんど夜も寝れない状態だったわけです。もういいだろう、これだけやって目標の、日本人は一五〇キロを超えないというのをあつさり超して、そして世界二位までいった。前年度の世界記録が一六七キロ、これを、とうとう一七〇キロを超えてしまったということ、最後は棄権してテレビで実況中継を見ようと思つておりました。ところがほとんど夜明け方、ふとホテルの窓を見たら朝三時半ぐらいです。うつらうつらしているうちに夜が明けてしまいました。こんな寝不足で、そういうのが三日間続いたわけですけれども、どうしようもないと思ひながら、ふとマッターホルンの頂上がバラ色に光って、天気予報を聞いても最後は一番条件がいいということがわかったわけです。しまった、もうペースの配分作戦をまったく間違えたということ、ですけれどももう遅いし、ただもう一つ考えてみたらスポーツというのはもちろん勝つこと、世界一になることが夢だったわけですけれども、それ以上、もう一つ自分に勝つということをもう一回置き換えてみたら、こんないいチャンスはないんじゃないか。世界の檜舞台で、別に骨折しているわけじゃないし、捻挫しているわけじゃない。全身打撲で体じゅうがガタガタしているだけだというならば、思い切って記録じゃなくて、もう一回自分を試すスタートまであ

がってみようということで、スタートまであがってきました。

ところが、僕は最後は通し番号一二番だったんですけれども、最後はタイムの関係で一番目にスタートすることになってしまったんです。早目にいつてスキーを磨いていたら、若手の選手が次から次へとあがってきました、年寄りは、三十を超えているのは僕ともう一人フィンランドのハッキンレーという選手だけだったんですけれども、それが皆本当おじさん大丈夫かなんていう感じで心配してくれているんですけれども、スタートしてしまえばもうあとは痛いもへちまもない。手塚治虫さんの鉄腕アトム、これはテレビの漫画でもすごく僕も大ファンだったわけですが、アトムのシールをもらってスキーにベタベタとはりつけて、「頑張れアトムより」なんて勝手に書いて、あるいは「スピードの鬼となれ」とかマジックで書いて、それを睨んでスタートしていった。最後の最後、頭から突っ込んで突っ込んで、そしてゴールを通過してもう一回ついでにぶっとんで転んでしまったんですけれども、イタリあのテレビでは実況中継をやって、なんとかかんとか、ミウラ、ミウラと、アナウンサーが叫んでおりました。みんな心配してソリをもったり担架をもったりかけつけて、通訳のお嬢さんに今なんて言っただんですかと聞いたたら、「三浦はまだ生きてました、生きてました、なんていわれた。」って言うんですね。

本当に今、あれほど転んでも転んでもあきらめないで、そしてその度ごとに次のレースでタイムを更新していくということで、みんなあきれておりました。ただあいつがあんな記録を出したのか、三十過ぎの身体障害者がそんな記録を出したのかと、あとで彼はトランシーバーで僕のタイムをはかって、そう言ってたそうです。一人、二人、三人。あとその年のレースは終わってみたら七位ということだったわけですから、終わって日本へしばらく帰って、ショックがとれた後に思っただんです。なるほどスポーツというのは、「見える世界一」と「見えない世界一」というのがあっていいんじゃないか。「見える世界

一」、当然ワールドカップのドルヒンだとか、オリンピックの金メダル、そして世界最高記録ということですが、しかしもう一つ先程言いましたスポーツマンの見えない分野、レースに望んでの最後の最後まで執念だとか、情熱だとか勇気だとか、あるいはまたそれまで何年、三年、四年、五年、あるいは過去のいくつか含めたいろいろな準備、工夫、知恵というものを、もしスポーツの神様が見えない分野をテストしてくれたら、どんな世界の歴史上の名選手よりも見えない分野では彼等とほぼ同格、あるいは追い越したんじゃないか。この見えないもの、神様からもらったトロフィーを本物の見えるものにするはずだ、と思ったときが丁度三十一歳。そして日本に帰ってきて、今度は同じことをやっただんじやつまらない。もう一つスキーというものをを使って、人の想像しなかったもの、自分でも想像しえなかったものを何かやってみようということで、取り組んだのが富士山の直滑降。富士山をそれまで何回も滑ってみた。朝日新聞の正月号を飾ってみたい、やっただんじや、これだけじゃ、ただスキーで滑るだけじゃつまらない。なにかもう一つ二つ付け加えようと思ったのが、パラシュート。直滑降してパラシュートでブレーキをかけてみよう。

これはおもしろいということで、また防衛庁の航空研究所で一年、二年、三年と実験を繰り返したところ、三年もかけることなかったんですけれど、二年目にやろうとしたら富士山の雪の条件が悪い。三年目にチャンスがやってきました。そしてスタートして一六〇^キ、八合目すぎてパラシュートを開く。五合目に飛び込む前に第二のパラシュートをもう一つ開いてとめてみた。こんなおもしろいことが世の中にあったかという言い方はおかしいんですけども、それまでは生きるとか死ぬとか、失敗したら命はないと承知の上で、俺はなんでこんなことをやっているんだろうと自分で思いながら、しかしやってみてみたいということで、あつという間に三年すぎていました。しかし終わってみたら、人間というのは何か自分で考えてみて、そして世界で誰も想

像しえなかったこと、こういうものをやる、言葉でいうと素晴らしさと言いますか、すがすがしさと言いますか、あるいはまたおもしろさといったものにすっかりとりこになってしまいました。

それからまたマッキンリーへ行ったり、南米へ行ったり、ウロウロしているうちにエベレストをやってみようということになりました、ただそれまでは富士山とか、イタリアのスピードレース、このへんはせいぜい五、〇〇〇メートルぐらいの高さです。今度八、〇〇〇メートル。わずか数字で三、〇〇〇メートルだけということですが、これが登山家にとっては一桁二桁違うスケールになります。などなど考えてみたら、お金のことも含めて四年間かかってしまいました。そして今度は防衛庁の航空研究所医学実験隊、本格的なパラシュートの宇宙飛行士の脱出のシステムというものに近い要素を含めて、今のエアバッグってありますけれども、体が時速一〇〇メートルで岩に激突しても内蔵破裂しないという体をプロテクトするシステムでやってみようということ、まったく科学漫画の主人公みたいな感じになって、そしてとうとういつの間にか、二年、三年たって仕上げ、そしてまた出発。スタートして八、〇〇〇メートルから飛び降りる。あつという間に半分まで。人間というのはこんなこともできるんだ。当時人類三十七億くらいと思っておりました。この人類三十七億の歴史の先頭をきりながらロケットが宇宙に出るというような、先頭をきっているような感じで山を降りていきました。あと真下が断崖絶壁のクレバスですから、これをどんどん左へきって平均斜度四五度の氷壁ですけれども、スタートして六秒で八〇メートル、そしてそれから左へどんどんきりながら、登山口へ脱出する作戦だったわけです。斜滑降始めたときに部分的に五〇度六〇度と、斜滑降したとたん肘が斜面にぶつかる感じで、気がいたらスキーがガチャガチャと氷の角にぶつかる。あつという間にスキーが外れる。そして転倒、転落。氷のツルツルの斜面をおっこちていきました。ふと見たらパラシュートがまだ開いていない。まだきれいだなと思いな

がら、パラシュートの紐をぐんと持ち上げたんですけれども、考えてみたらこのパラシュートでは時速八〇メートル以下に制御できないように設計してあるわけですから、ツルツルの氷を今八〇メートルで落ちていんだということ、落ちていてはいるわけですが、考えてみたらあと残り八〇メートルしかない。その下は大きな五〇〇メートルぐらい飛び下りるクレバスになってしまいうわけですから、もう助かるわけがないと思いながら、その時ふと、当時三十七歳だったんですけれども、三十七年生きてたのは一つの人生の夢だった。その時ふと百歳まで長生きしたら、百年たつてあの世へ行ったら、きっと俺はその百年が夢だと思う。となれば、しよせん人生というのはやっぱり夢だったのか。夢、夢という字がどんな連なりながら、さて、次はなんだろう。三千年、三万年、三億年たつた。俺は何をやってるんだろう。この星にいるんだろうか。

あるいは津軽半島、僕が高校生の時ひとりぼっちでずっと夏休みに入つて、海へもぐつて岩の洞穴で暮らしておりました。その時も、ある時岩に登つてふと悪い予感したんです。ほつとみたら崖の百メートルの竜飛岬の断崖に登つた、その一番上に全然予想もしなかったんですけれども、まむしがとぐろを巻いて、目の前で睨んでおりました。睨んだというか、一瞬とびかかる寸前でした。これが偶然、ほんと右手にちよつと岩のかげらがちよつと動いたので、それをぶつけて、そしてまむしを岩ではじきとばして、よじ登って逃げかけているまむしのしっぽを捕まえて、一生懸命ひきずりだして今度は食うか食われるかの食う方の立場で、皮をひんむいたら丁度大きな白魚みたいな子どもが二匹出てきましたけれども、それを海岸へおいてもう一回焚き火してまむしステーキを食べたんですけれども、本当にその見えた一瞬がスローモーションになりました。エベレストの時も何か落っこちて、さっきの岩から落ちたときも、子どもの頃から一瞬、危機的状況の最後のクライシスから脱出する、一つしかないというものを選ぶその一瞬というのは人生にあるのではないかと思います。

そのエベレストの場合、落っこちて岩から飛び降りた瞬間に、もう一回人間はできる。丁度飛行機から針を砂漠に落つこととして、それを探するようなそんな心細い絶対絶命のそういう状態から、ふと岩から飛び出たらもう一回人間できるんじゃないかという感じがしました。そしてもう一回スローモーションにかえて、体をもう一回反転してみたろうつぶせに斜面にはりついて、そしたらどうしたわけか、どこかへ飛んでいった一方のスキーが胸の内側に入ってきたんです。これを両手で抑えたら、丁度岩の下が新雪が吹き溜まりみたいになってかぶっておりまして、ここへすぽっと入って、両手で抑えたスキーがブレーキになって雪けむりをあげて止まったんです。どっちにいいのか一瞬わからなかったんですが、この世にいいのか、あの世にいいのかよとわからない一瞬があったんですけども、ふとじっとしてたら、この辺雪がとけてるし、バイザーをはずして上を見たら、うつぶせで今の斜面にはりついている。斜面のはるか上に、エベレストの頂上に、白い雲がさつとあおいでいく。きれいなあ、それがずいぶん不思議な感じがしました。不思議な感じというのは、一体生きているというのは何だろう。しばらく何か自分で生きているのが不思議だったんです。そうだ、もう一回俺は人間ができるんだ。もう一回俺は三浦雄一郎という人間と同じ人間の姿で、なるほど生きているということは、自分自身ともう一回人間の姿で巡り合うことなんだ。なんかそれがずいぶん不思議な感じがしました。なんか懐かしいな、もう一回俺は俺に会えたという言葉はおかしいんですけれども、その時、植村直巳さんが五〇〇メートルくらい下でそれをみてくれました。スタートする。転倒する。絶対絶命の一瞬からまた、止まって生還した。彼がそれを見てくれておりました。救援隊が駆けつけて、すぐピッケルとアイゼン、ロープで脱出して、そしてもう一回人間の世界に帰ってきた。この時に本当にしみじみ俺はもう一回人間が出来るんだな。もっとましな人生が送れそうだなとか。ただ、下界へ降りてみると、ただの人になっ

て同じことをウダウダまた繰り返したり、あるいは酒を飲み過ぎて後悔して二日酔いになってみたりと、まったく下界に降りたらただの人ということになってしまわうんですけれども。

植村直巳もそうです。彼は本当に、山には、北極にはすばらしい、人間の限界を超えながら何かをやるうということをやりましたけれども、下界へ降りるとお互いにウロチョロしている。一体なんで俺達こんなことをやるのだろうということ、ときたま雑誌の対談とかあるいはアラスカでばったり会って話しますが、その時やっぱり何か自分でこういうものを、さっきのザ・ファーストそしてフォー・エバーと、自分で何かやってみたいということをし遂げて、そして自分達の歴史の中に、ただ名前を残してみたいというのではなくて、こういうことをなし遂げたという足跡を残してみたいと思うのです。

僕の場合、たまたま生まれが青森県の八甲田山。この八甲田山の未知の斜面を子どもの頃から滑って、山の向こうは何だろうという憧れ。そしてまた中学校は東京で暮らしておりましたけれども、東京の今の千歳高校という学校。私共同期生が仲代達矢、二年位前に亡くなった山川千秋なんていうのは同期生だったんですけれども、本当に今、食うや食わずの少年時代の、昭和二十一、二十二年の焼け野原の東京、まさかこんな日本が、世界がこんな姿になるとは想像もしえなかったわけです。その世界がこんな形で私共にいろいろなチャンスを与えてくれているわけです。皆様方もこれから青春、新しいスタートを迎えているわけですけれども、考えてみますと人生、これから十年先社会が、またこれから二十年先、私共学生時代から考えますと、もうすでに三十年過ぎてますけれども、これから三十年先と、若いころの先とというのは以外と想像がつかない感じがしましたけれども、あつという間に月日というのは早いものでして、少なくとも十年ぐらい先を考えますと、本当に今と信じられないくらいの時代の進歩と科学の進歩ということが予想されるんじゃないかと思えます。その時にいろいろな

チャンスが数多く私たちのまわりに向いてくるのじゃないか。実は僕自身も北大を卒業して助手をやっていた頃、第一次南極観測隊の隊員候補だったんです。いろいろ訓練を受けたりテストを受けたりしながら、俺は必ず行けると思っておりました。そして自分で勝手に南極大陸をスキーで横断しようとか、南極大陸の一番高い山からスキーで滑る、そういうことを勝手に自分で考えて、そんな計画を考えておりました。これが西堀先生にバレてしまって、あんなバカな男を連れていったらどこでどうなるかわからない。ということはどうとう僕だけが仲間からはずされて、みんな四人とも行ってしまうって、一人残されて大変くやしい、情ない思いをしたことがありました。オリンピックもいけなかったしということもあったわけですけど、青春時代にととう果たせなかった夢、これをずっとずっと捨てないで持つておりました。

とうとう五十二歳になってやっと、今アメリカのウォルトディズニの社長をやっている、昨年の全米の所得No.1、年収七十二億というフランク・ウェルス。彼と組んでとうとう特別機を仕立てて南極に到達する。そこからまた一番高い山、五、一四〇〇で零下七〇度という世界へ行って、スキーをはいて降りてくる。これも本当に考えてみますと皆様方と同じ年代に南極に行きたいなと思って、おいてきぼりをくった悔しい思い。これ、いつの間にかずいぶん月日がたってしま

ましたけれども、五十二歳になって実現できたわけです。夢というのはすぐ実現できる夢。すぐ可能性のある夢というのは様々あります。しかしそれが二十歳の時に果たせなかった夢、そしてまた時代がくれたチャンスというものをとらえて、とうとう五十をこえてこれが実現できるということもあるんだということもわかりました。

そんなこんなを含めると、皆様方それぞれ人生、持つべきもの、お金があれば一番いいだろうし、都会だったら土地があれば、地位が、名誉が、そんなものはいずれまたどこかの付録みたいになっていくる可能性もあるんですけど、一番大事なものは、もつべきものはこういう目であり、一緒に実現できる仲間であり、そういう青春時代の特権といえますか、夢をもつこと、そして夢をあきらめないで、そしてまた夢を実現できる、一人じゃできないわけです。反対する友達もいてもいいだろうし、応援してくれる友達もいてもいいだろうしということも含めて、また皆さん、それぞれ夢を持ちながらそれをいつかまた忘れず、そしてまたこれを必ず成し遂げるんだということを心の中に誓いながら、青春を歩んでほしいなと思っております。

予定の時間をちょっとオーバーして皆様方の質問の時間と、残りの時間があればまたお願いしたいと思っております。一応話の方はこのへんで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

(プロスキーヤー・札大教養部特別講座講師 一九九〇・三・二集録)